

04

敷葉・敷粗朶の分析



敷葉・敷粗朶の検出状況（北東から）

平城京造営の最終段階、佐伯門前では斜行大溝を埋め立てて条坊道路を造成しました。斜行大溝を埋め立てる際の軟弱地盤を改良するための工夫が、敷葉・敷粗朶工法です。その調査では、複雑かつ数層に及ぶ葉や粗朶（木の枝）を層ごとに記録しなければなりません。そこで、ドローンで空中からの垂直写真を撮影し、オルソ画像を作成することで効率的に記録・掘り下げを進めることができました。

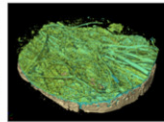
さらに、その構造や機能を明らかにするために、大型土壌試料を切り出し、X線CT装置で撮像する非破壊解析や、土壌を水洗することにより、敷葉・敷粗朶を構成する樹種や細かな構造の観察・解析をおこないました。



空中から見た敷葉・敷粗朶の様相（オルソ画像）



土壌試料切り出しの様子



土壌試料のX線CT装置での撮像

05

地震痕跡

旧河川を埋め立てた土地柄、本調査区では広い範囲にわたって、地震動による地割れ、液状化、そして液状化に起因する砂浜や噴砂といった地質の痕跡がみつかりました。

これらの痕跡は震度5弱以上の地震動にもなっている現象であり、7世紀以降、この地で数度の大きな地震があったことを示しています。



土層にみえる地震痕跡



液状化にともなう砂浜と地割れの平面検出状況

奈文研の地下に眠る遺構

平城京右京一条二坊・二条二坊
一条南大路・西一坊大路の調査
発行年：2018年

発行：独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2-9-1

奈文研の
地下に眠る
遺構平城京右京一条二坊・二条二坊
一条南大路・西一坊大路の調査

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所



みつかった遺構

02 齋串作りと祭祀



溝の埋土上面でみつかった祭祀遺構

一条南大路造成のために斜行大溝を埋めた土の上から、多数の齋串が小型の壷などとともに出土しました。通説では齋串は地表に押し立てて境界を示すなど、祭祀に用いられたとされています。埋め立て工事の最終段階に、この場所でおこなわれた祭祀の跡と考えられます。

齋串の完成品に混じて、その原材料となる割材も一緒に出土しています。年輪年代学的手法を応用し、それらの接合関係を調べたところ、いくつかの齋串や割材が同じ材から作られていることが判明し、ここで出土した齋串の製作過程が明らかになりました。

その結果、この場で齋串を製作し使用していた可能性も考えられるようになりました。齋串を使った祭祀の具体相を示す貴重な事例といえます。

同じ材から作られた2本の齋串(左)
年輪の幅が一致する接合部分拡大写真(右)

01 調査の概要



平城京内位置図



発掘成果から推定される秋篠川旧流路

奈文研本庁舎は特別史跡平城宮跡の西に隣接しており、平城宮の西面中門である佐伯門のすぐ西側に位置します。南北方向の西一坊大路と、東西方向の一条南大路がT字に交差する場所にあたります。

庁舎建て替えにともなう本格的な発掘調査は、2014年4月から2015年2月にかけておこないました。その結果、旧秋篠川の付け替え工事や斜行大溝の整備、それらを埋め立てた後の糸坊道路の施工など、平城京運営に関わる大規模な土木工事の実態、造営後の当地の利用のあり方が明らかになりました。

03

遷都当時の都の呼び名は？

(目次)

- 奈良京串
- 平城京串
- 散持仕奉車使丁
- 下是奉土
- 平散
- 无
- 四月十二日



裏 表

原寸の約70%



斜行大溝を埋めた土からは、「奈良京」と書かれた木簡も出土しました。同じ場所からは里制下(701~717年)の木簡も出土しており、「奈良」の表記が平城遷都(710年)前後にまで遡ることがわかりました。